NISHINOMIYA
EBISU

西宮えびす

平成三十年
夏号

日本一
西宮
神社

特別インタビュー

桂米團治（かつらよねだんじ）さん

大阪でお生まれになり尼崎市にお住まいになった事もある桂米團治さん父親の桂米朝師匠に弟子入りされ、落語以外にもクラシック音楽や映画、テレビ、舞台など幅広い分野で活躍される米團治さんに神社や神様、言葉や「福」にまつわるお話を伺いました。

Katsura Yonedanji Interview

昨年十一月、西宮神社の誓文祭で落語をおつとめ頂いた印象は？

当日の会場の雰囲気がとても明るかったので、「桃太郎」という噺をさせて頂きました。皆さん良く笑って頂いて嬉しかったです。

西宮神社や「えべっさん」が出てくる噺では「えびす大黒」という小咄があります。また明治時代に桂文吾さんが創作された「阿弥陀池」という噺のクスグリにも西宮のえべっさんが出てこられます。ほかに神社にまつわる噺では「稲荷俥」や奈良の春日さんの眷属である鹿を扱った「鹿政談」という噺もあります。落語と神社は色々な繋がりがありますね。

「舟船（ふねふな）」と言う狂言も景・の良い西宮を目指す話で浪速の西の郊外にある西宮が室町時代から周知されていたという事になると思います。私も尼崎に住んでいましたから西宮の空気に憧れを持っていました。

海で掬い上げられたえびすさまをお祀りする西宮神社、そして磐座を経て六甲山へ続く神聖な筋が在ると思います。越木岩神社や、立派な磐座が沢山ある市立北山緑化公園を経て六甲山に連なる筋に秘められた目に見えない氣は大きなエネルギーだと思います。また天照大御神の荒御魂を祀った広田神社と別宮の南宮神社も含めてえべっさんのある西宮の浜から六甲山に続く筋は尼崎の人間の大きな憧れです。素晴らしい財産だと思います。

親父の米朝は神職の資格も持っていました。実家のある姫路市大善町という所に九所御霊天神社（くしょごりょう）があって、神職が欠員の時、郵便局長をしていた米朝の祖父がお宮を守る役を頼まれました。米朝の父は早くに亡くなりましたので、米朝は旧制中学に入るころに神官の免許を取るべく祝詞奏上を覚えて、大東文化学院に行くんですが、その頃から寄席通い、歌舞伎座通いが始まります。

僕も幼いころから祝詞奏上を耳にしていた関係か、その血が流れているのか分かりませんが、いつの頃からか、お宮さんをお参りするのが好きになりました。西宮は気が向いた時に来て、本殿にお参りした後は境内を全部まわります。特に池の真ん中の市杵島姫さんは大好きで、それから宇賀魂社と奥の稲荷社の位置などの関係も面白いなと勝手に楽しみながら回っています。

ご著書の中で落語をお客さんと一緒に作っていくという件（くだ）りがありますが…

（例えば）今日は「鹿政談」をしようとか「阿弥陀池」をしようと思って高座に上がっても、ぱっとお客さんの顔を見た時に「あ、今日この話アカンわ、今日はちょっと変えなアカンわ」と思う瞬間が有るんです。これはもう一秒ですね。一秒から三秒喋る間でお客さんの気を掴むんですね。それでちょっとマクラを振る、「ああ今日この話はアカンなあ」マクラを変える、で「この話で行こ」とネタが決まって来ます。お客さんの前で一言二言発した瞬間にネタが決まってしまうんです。

神主だけでなく参列者や地域と行なっていくお祭とも似ていますね。

（天の岩戸の神話の時でも国中が暗くなってしまって困った時に皆で相談して祭典をして、その中でアメノウズメノミコトが踊ると皆が笑って解決が導かれたという、お祭の原点が落語を披露する場と似ているのかなと思います。）

そう。だから僕はアメノウズメが大好きです。アメノウズメに喜んでもらう旅をしている気がします。心の中のアメノウズメであったり、客席の中に見つけることもあります。アメノウズメに喜んでもらったら男にとって、こんな嬉しい事はないじゃないですか。アメノウズメは時には自分の女房であったり、自分の恋人であったり、集団の中のリーダーであったり、お客さんの一人であったりするけれども、「ああ、あの子あんなに喜んでる」と思うと今度はあの子を楽しませるために落語をやって、それで会場全体がワアっと盛り上がった瞬間っていうのは非常に嬉しいですよね。男ってアメノウズメに喜んでもらうために生きてる様な気がしますよ（笑）

それが落語会のお客さんであったり、春の大祭の参列者であったり色んなアメノウズメが居るんですけど、神社の女神さんの場合と同じで少しベールに包まれた部分があって、これが日本の神道の面白い所で、日本人の気質に通じる所があると思います。曖昧さが悪く言われる事もあるけど、この曖昧さが和（なごみ）をつくる事に繋がっている気がします。神社の信仰にも、そんな部分があって、それが面白くって、これを日本人がもっと誇りに思って世界に発信していく必要があると思います。

福男や福にまつわる話はありますか？

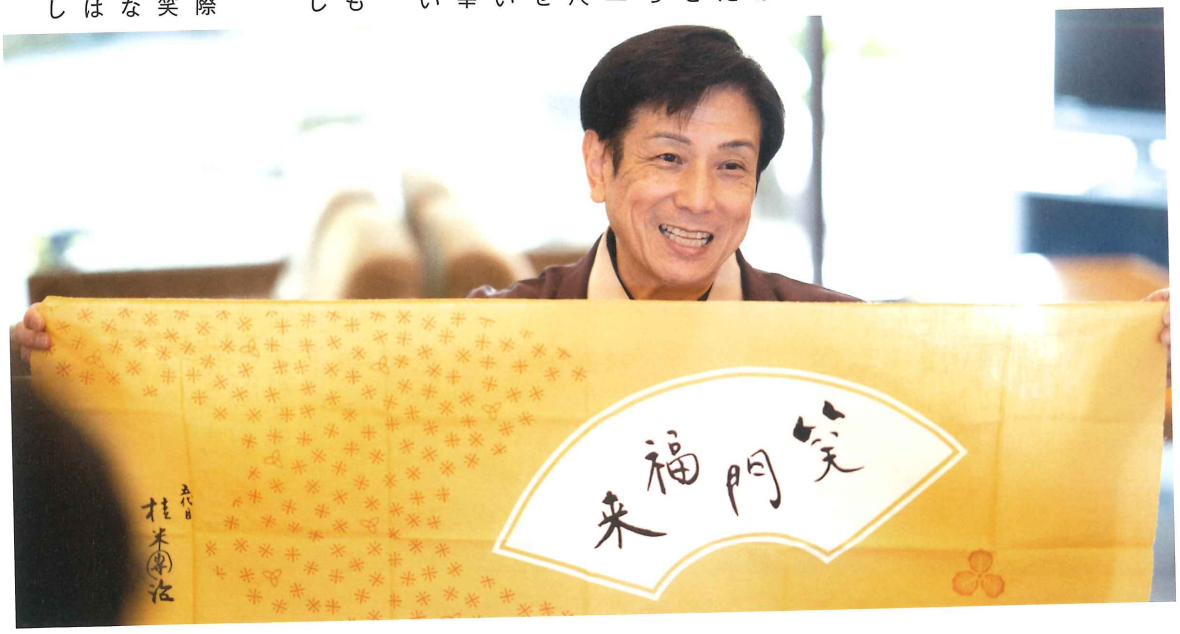
福のイメージは「笑う門には福来る」というのが私の落語家としてのポリシーで、手拭いには必ず「笑門福来」って書いてるんですけども、私は「来福」より「福来」のほうが好きです。先ず笑おう、そうすれば福がやって来るというイメージかな。

「福」には色んな概念があるけど、やっぱり幸せだと思いますね。みんな幸せになって欲しい。人によっては「地位が上がったり」「お金が儲かったり」と尺度は違いますが、皆が幸せになるのが「福」だと思います。落語を聞いて皆が幸せになって下されば思います。

西宮神社にはこれからもお参りを続けますので宜しゅうおたの申します。

●

インタビューの中で実際に小咄を聞かせて頂き、笑いも交えた楽しい取材になりましたが、大事なネタは次の御奉納の機会のお楽しみに致しましょう。



◎福にまつわることば

「お福わけ」

神社という職場に上がった当初、先輩神職が使われる「お福わけ」という言葉は「おすそ分け」と似た意味であろうと推測は出来ましたが、あまり馴染みがなく印象に強く残りました。「言霊の幸（さきは）ふ国」日本の伝統を大事にする神社なればこそかと思いました。祭典が済んだ時にも「お疲れ様」とは言わず「おめでとうございます」と挨拶を交わします。

そのような祭典や日常に参拝者や来客が持参された品物は御神前にたてまつった後、職員で分け頂きます。目上の人に渡す時でも「おすそ分け」というと品物の端の方や残り物を渡すような感じがありますが、「お福わけ」と言えば頂き物が更に有り難く感じられますし、多くの人に配って取り分が少なくなっても損をした気がしないのではないでしょうか。今回、社報に福に関わる言葉の文章を載せるに当たり「お福わけ」という言葉が一般的かどうか調べたところ『精選版　日本国語大辞典』に御福分。もらい物などを他人に分けてやること。おすそわけ。と記載があり、明治八（一八七五）年の歌舞伎「裏表柳団画」五幕に「何れからの御進物かお福分けに一反づつ頂戴したい」という用例が挙げられていました。

もしかすると遥か昔の採取狩猟生活を送っていた先祖たちの考え方が淵源に在るのかも知れません。稲作など農業や林業、水産業、商業や工業のほか多様な産業が発達する現代に至るまで、自然や神々の恵みに感謝しつつ、家族をはじめあらゆる生物や環境と共に生きてきた日本人の考え方の一つなのではないでしょうか。

西宮神社で正月の十日に行われる「福男選び」は必ずしも足の速い人が選ばれる訳ではなく様々な御縁と巡りあわせで福男が認定されます。福男に選ばれた三人の方々にはその一年の折々の祭典に参列しながら栄誉を胸にお過ごしになり、周りの方々に福（幸せ）を分け広めて頂くようお話しをしております。

本号表紙では、縁起物として広く大切にされてきた「福百図」を参考にデザインしています。

夏の十日えびす
夏えびす

正月の十日えびすから丁度半年後の七月十日は境内の沖恵美酒神社（別名あらえびす神社）の例祭日です。沖恵美酒神社は、えびすさまの力強く活動的な荒御魂をまつる神社で、七月中「夏えびす」として境内は賑わいます。

七月 夏えびす日程

七日　夕刻から　七夕 天の川（拝殿前の神池）
（天の川は十日、二十日の夕刻も実施します）

八日　九時　あらえびす神社奉納　子供相撲大会

万燈籠祭：点灯式

◎万燈籠

当社の境内には江戸前期から現代に至る約330基の石燈籠が祈願や感謝の気持ちを込めて奉納され、御神前あるいは参詣道の御灯（みあかし）として点（とも）されてきました。現在は更に地元をはじめ多くの方々のご協力を得て5000個のロウソクに御神火（ごしんか）が分かたれ、この夜にしか見ることの出来ない幻想的な御神域が浮かび上がります。喧騒を離れた浄闇と、清らかな炎の揺らめきを体験ください。

九日　十六時　あらえびす夜まつり　宵宮（境内の松林ほか）
十日　十一時　境内末社　沖恵美酒神社祭
十六時　あらえびす夜まつり（境内の松林ほか）
二十日　十時　夏祭（本殿のち拝殿前）
十八時　えびす万燈籠（本殿のち境内）
三十一日　十時　境外末社　住吉神社夏祭
・船だんじり巡行
十六時　住吉神社境内縁日屋台

◎子ども相撲大会

あらえびすさまの力強さや躍動感を頂いて子供たちが強く元気に成長するよう幼稚園児と小学生が境内で相撲を奉納する大会です。（裏表紙の要項をご覧になり奮ってご参加ください）

◎あらえびす夜まつり

日本では神話の時代から神様にも人間にも酒は不可欠なものとされ、神社のお祭りや参拝でもお下がりの神酒を頂くまでが儀式の次第に含まれています。沖恵美酒神社祭の前夜と当夜に境内の松林を中心にエビスビールの飲み比べなど美酒の宴が催されます。

文化研究所だより（十二）

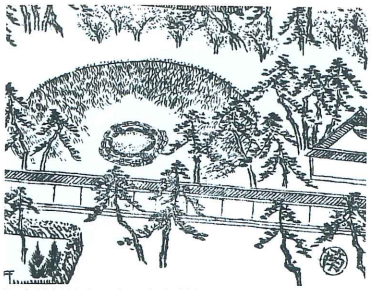
西宮神社境内での芸能興行

毎年正月に西宮神社で催される十日えびす神事の間は、境内外に多くの屋台が立ち並び、大変な賑わいを見せています。その中でもひときわ目立つのは、〈ろくろ首〉がゆらゆらと首を揺らしながら子供たちを招き寄せる、お化け屋敷の大テントでしょう。また表大門を入ってすぐ横で、かわいいお猿さんが色んな芸を披露する猿まわしも、参拝された方々の笑顔と歓声を集めています。

ではこのような見世物や諸芸能の興行は、いつ頃から境内で行われていたのでしょうか。そこで西宮神社の神主が代々書き綴ってきた『御社用日記』を紐解いてみましょう。

元禄七年（一六九四）分から現存する『御社用日記』で、興行に関する最も古い記事は、元禄十五年（一七〇二）に京都のえびす講が西宮神社に対し、境内での相撲興行を願い出た事例です。当時相撲は神仏に奉納する芸能の一種とされ、西宮神社では毎年八月の神事で〈神事相撲〉が催されていました。ちなみに土俵は境内南側の駐車場付近にありました。

一方、寺社の修繕費用等を集める目的で行われる〈勧進相撲〉には、たくさんの見物客が押し寄せました。あまりの人気ぶりに治安の乱れを心配した江戸幕府は、何度も禁令を出しましたが、庶民の相撲熱は冷めることなく、江戸・大坂・京の三都を中心に〈勧進相撲〉はその都度再興しました。


西宮神社境内にあった相撲場（『西宮神社略図』）

そうした世間の相撲人気に乗じつつ、えびす神への信仰心の篤さを表現するため、京都のえびす講は境内地を借りるお礼として、金百両を神社に寄進すると申し出ました。これは当時の神社の年間収入の約二倍にもおよぶ金額で、講の代表者が幾度も神社を訪れて交渉を重ねました。

しかし結局のところ〈勧進相撲〉は実現しませんでした。西宮町を支配する尼崎藩が、領内での相撲興行は「御国法」に触れると許可しなかったからです。他にも〈辻芝居〉や〈アヤツリ〉等の芸能興行も堅く禁止されていたらしく、どうやら神社側も許されないことは分かっていたようです。三都とは異なり、尼崎藩がこうした興行を厳禁していた理由ははっきりしませんが、幕府から大坂城を守護する特別な役目を与えられていた手前、不特定多数の人々が集まって熱狂する行事は、治安上極力避けたかったのかもしれません。従って境内で認められていたのは、氏子中がえびす神のために催す八月の〈神事相撲〉だけでした。

枚岡神社での相撲風景（『河内名所図会』）

ただこの状況に少し変化が見られるのは、正徳～享保年間（一七一一～一七三五）以降です。特に享保七年（一七二二）の西宮神社ご開帳の際は、境内で〈まんざい・見せ物・小芝居・稽古浄瑠璃・歌祭文〉の人々が芸を披露したようです。せっかくのご開帳なので、尼崎藩も境内の賑わいのため大目に見たとも考えられますが、注目したいのは正徳元年（一七一一）に尼崎藩主が青山家から桜井松平家に交代したことです。

実は交代の翌年、藩の役人が西宮神主に対し、八月に加えて三月の神事でも〈神事相撲〉を行うべきではないかと「逆提案」する場面が見られます。また享保八年（一七二三）には、人形つかいで有名な産所村のあやつり芝居興行を、境内で催すことが認められています。一方、神社も積極的に神事祭礼時の芸能興行を藩に出願しています。ご開帳の事例もあわせると、芸能興行に関する尼崎藩の政策が、藩主家の交代で変化した可能性があるのです。この点は西宮町の芸能文化史を考える上で非常に重要な要素と言えるでしょう。むかしもいまも神社と芸能興行は切っても切り離せない関係があるようです。

なお当該時期の『御社用日記』を翻刻した『西宮神社御社用日記』第三巻（清文堂出版、二〇一五）には、芸能にたずさわる人々や芸能興行に関する記事が度々登場しますので、興味のある方はご一読いただければ幸いです。

◆

さて西宮神社では、境内のあらえびす神社（沖恵美酒神社）の祭典（七月十日）に合わせ、本年も七月八日（日）に「奉納子ども相撲大会」を開催致します。巨漢の力士や近郷の力自慢がぶつかりあった江戸時代の境内相撲に負けないぐらい、子どもたちの取組に大きな盛り上がりを期待したいものです。

（西宮神社文化研究所主任研究員　戸田靖久）

商店の引き札

御神影札（軸装）

西宮神社　えびす信仰資料展示室　第25回企画展

福徳の神 えびすさまの絵姿（えすがた）

平成30年 6月1日～9月30日（午前9時～午後4時）

にこやかなお顔で大きな鯛を抱えた福の神、えびすさまの御姿は全国的に誰もが思い浮かべられる程おなじみになっています。

これは平安時代から漁師たちや人形操（あやつ）りの傀儡師（くぐつし）たちのえびすさまへの信仰や活動が元となり、一般の方々にも広まっていった為と考えられます。ご神像や絵像は様々な形で祀（まつ）られましたが、室町時代には七福神の信仰が隆盛し、安土桃山時代になると「えびす、だいこく祀らぬ家はなし」とも言われ、家の神としても各地で崇められました。

更に西宮神社は今から350年ほど前の寛文3（1663）年、四代将軍徳川家綱により造営された本殿の維持の為、えびす像札の頒布を当社に限って許可する沙汰が江戸幕府より発せられ、えびす信仰の中心的な神社として西宮神社が知られるようになります。

本企画展ではこのようにして広まった福の神えびすさまの御姿の内、家々の神棚や床の間に祀られる御神影札（おみえふだ）や掛軸をはじめ、商店から配られる引き札、お皿や盃といった生活用品など様々な形で描かれたえびすさまのふくよかな「絵姿（えすがた）」を集めました。

日本各地に伝わる多様な御神影札や、目を引く色彩と親しげな絵像で表された引き札、細密に描かれた盃など、祀る人や使う人、またそうした場面を想像しながらご覧頂きたく存じます。

漁業の神・商業の神、そして福の神として人々に信仰されるえびすさまの御姿を通して、参拝・入館の方々に益々福が授かりますよう展示いたします。

商店の引き札

えびすさまと赤い鯛が鮮やかな小皿

社頭より

とおかし

毎月十日の旬祭に「十日参り」（参列）をされた方に「とおかし」（和菓子）をお配りします。「西宮和菓子ブランド発信事業実行委員会」の参加店舗が自信をもって月替わりに作られる「とおかし」は当日の旬祭で御神前にお供えされ、参列者には「お福わけ」として配られるほか、担当店舗でも限定販売が行われます。

皐月【5月】

『えびす餅・福だま』
翁菓舗

卯月【4月】

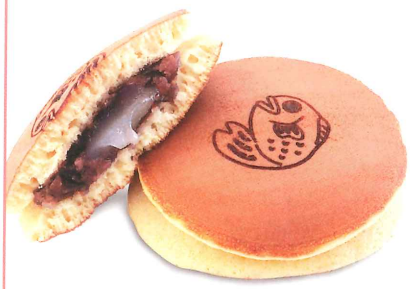
『えべっさん・鯛』
千鳥屋宗家

葉月【8月】

『えびす金鍔』
谷矢製餡

文月【7月】

『目出鯛みかさ』
高山堂



水無月【6月】

『めで鯛・宝舟』
御菓子司 昇月堂

霜月【11月】

『宝箱』
こはく

神無月【10月】

『戎福栗』
君栄堂本舗

長月【9月】

『境内・鯛』
菓一條栄久堂吉宗

弥生【3月】

『えびす舞』
成田家

如月【2月】

『御神酒（おみき）まんじゅう』
甘辛の関寿庵

師走【12月】

『えびす福耳大福』
あおやま菓匠

百太夫神徳宣揚講演会

去る3月24日(土)第一回百太夫神社芸能上達・技能上達講演会を開催しました。

「いけばなへのいざない～嵯峨天皇の遺されたもの～」と題して講師に、いけばな嵯峨御流副総裁 岡田脩克氏と、同流理事で西宮えびすの宮会々長の岡田芳和氏をお招きしました。

10時30分に先ず御本殿を正式参拝し、社頭説明の後に百太夫神社を参拝しました。神社会館に移動し11時に宮司挨拶、ついで岡田脩克氏の挨拶により開演しました。

講演会では、まず岡田芳和氏の講演に始まり、次に岡田脩克氏が実際に花を活け、それを岡田芳和氏が説明、最後に岡田脩克氏が二胡・篳篥・シンセサイザーの奏でられる中でいけばなの技法を披露され12時30分に閉会しました。この講演会は、今年が初の試みで、参加者は当初200名を予定していましたが、最終的には350名に達し、会場は満員となりました。

『西宮神社文書』第二巻 刊行

この度『西宮神社文書』第二巻が上梓されます。本書は既刊『西宮神社文書』第一巻に引き続き、現宮司家に残っていた、戦前に原稿用紙にペン書きで筆写された筆耕原稿を翻刻したものです。

所収史料は約二七〇点で、年代は江戸時代前期から明治初年にわたります。その内容は幅広く、神事や神社の経営に関わっていた人々の動静や、絵馬殿建立、見世物小屋、ご開帳、広田神社の明礬(みょうばん)採掘など神社内の事柄のみならず、江戸時代に全国の神社を統括していた吉田家に関係する文書や、幕末に攘夷関連の祈祷を広田神社が行っていたことを伺わせる史料などが見られます。

また、陸奥国安達郡片平村の争論や大坂及び近国の似せ札頒布問題、一時期名古屋に置かれていた配札出張役所の変遷など、当時の御神影札頒布状況の一端を知ることが出来る史料が多数収載されています。

往時の西宮神社の実態を知る貴重な史料集です。この機会に是非お手にとってご覧ください。

＊書籍については清文堂出版又は社務所までお問い合わせ下さい。

えびすさまの月参り

えびすさまは福の神、商売繁盛の神として全国津々浦々より崇敬を集めており、その御神徳にあずかるべく、多くの方が全国各地から本社参りされ、御祈祷を受けられています。中には毎月お参りになり商売繁盛や心願成就の御祈祷を受けられている方もあります。

当社ではえびすさまの御神徳をさらにお受け頂き、ますます繁栄されますよう、御祈願が成就いたしますよう、特別に「えびすさまの月参り」を実施致します。

本来であれば毎月十日に御祈祷をお受け頂くべきところですが、皆様の都合の良い日にお参りされ御祈祷をお受けになり、えびすさまとの御縁をお結び下さい。

月参りの御祈祷を受けられますと、祈祷後境内おかめ茶屋で休憩出来るお茶券を進呈致します。また御祈祷の中で特別に「月参り福鈴祓」を致します。

「えびすさまの月参り」でお参りの方は受付にお申し出ください。最初に「月参り参拝証」をお渡し致します。次回より月参り参拝の際、受付にご提示下さい。

えびす
NISHINOMIYA EBISU
平成三十年 夏号
西宮えびす 平成三十年夏号（通巻第四十九号） 平成三十年六月一日 発行
発行／西宮神社 〒662-0974 兵庫県西宮市社家町1-17 電話 0798-33-0321 FAX.0798-33-5355
編集／文化課 印刷／小西印刷所

子ども相撲大会参加者募集

平成一八年より、沖恵美酒神社祭（七月一〇日）に合わせ直前の日曜日（本年は七月八日）に、お子様の健やかな成長を願う子ども相撲大会を奉納しております。

幼稚園から小学生まで、男女問わず募集しておりますので、皆さんのご参加お待ちしております。

【競技方法】
年齢別に分かれてのトーナメント戦

【競技日時】
平成三〇年七月八日

【応募資格】
●一般の部
幼稚園保育園児（男子・女子）
小学校一～六年生（男子・女子）
●経験者の部
小学校一～六年生（男子）

【応募方法】
社務所受付にて申込用紙を用意しております。（六月一八日必着）

※写真はご会食プラン¥8,500（会席料理）

ご会食プラン¥8,500（会席料理）
御膳料理 ¥6,000
お子様料理 ¥3,500

こんどの七五三はしっかりオシャレしてえびすさまにお参りしましょ♪

衣裳・お着付け・写真・お食事
大切な祝いの一日は西宮神社会館にすべておまかせ。

七五三パック ¥35,000
貸衣装・着付 ヘアーセット 写真（一式）
お母様のヘアーセット・着付 前撮り・スナップ写真も承ります。

七五三衣裳展示ご予約会
7月28日（土）・29日（日） 9月29日（土）・30日（日）
8月18日（土）・19日（日） 10月20日（土）・21日（日）

会食・着付受付開始は7月28日（土）より

info@jinjyakaikan.com 西宮神社会館 ☎(0798)23-3311

編集室から

ここに社報『西宮えびす』四十九号をお届けいたします。

さて、今号より新連載「福にまつわることば」が始まりました。えびすさまといえば七福神にも選ばれる代表的な〝福〟の神様ですが、「えびすだいこく福の神」と並び称されますように日本では特に人気がある神様です。

実はこの七福神の中で日本の神様はえびすさまだけという事はご存じでしょうか。

もともと毘沙門天・弁才天・大黒天はインドの神様。寿老人と福禄寿は道教の神様。そして布袋尊は実在の僧といわれていますので世界の諸神と比べても引けを取らない、ご神徳のあらたかな福神として信仰されてきた事が窺えます。

皆様にとりまして〝福〟とはどんなイメージでしょうか。

本連載を通じてえびすさまが下さる福についてご考頂くきっかけになれば幸甚に存じます。

特設ホームページで西宮神社の最新情報をご覧ください。

西宮神社 公式サイト 検索
http://nishinomiya-ebisu.com

西宮神社 公式サイト QRコード